昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十九年八月十[illegible]日発行（毎月一回・十五日発行）
（第一八四号）

慈光

第十六巻　第八号

目次

「教行信証」大信海釈（二）……近角常観……（1）
善財童子の求道……福島政雄……（5）
正法と不思議……福田鉄雄……（12）
ふるさと……松本解雄……（15）
源信僧都の和讃三首……花田正夫……（17）

『教行信証』大信海釈（二）

近角常観

六

次には

『凡そ大信海を案ずれば、貴賤緇素を簡ばず、男女老少を謂わず。……』

親鸞聖人御一代の御教化は、実にこの大信海一つをお知らせ下さる外無いのである。蓮如上人は『御文』に宣わく聖人一流の御勧化のおもむきは、信心をもて本とせられそうろう、云々。

実にこの大信海釈のお示しが、この三信釈の結文にあるのが有難いのであります。

「凡そ大信海を案ずれば」――実に深いとも〳〵底の知られざる信心の大海である。その大信海を按ずれば、「貴賤、緇素を簡ばず、男女老少を謂わず」――何うも御同様人間は、位で上下貴賤の別があり、僧あれば俗もある。緇素は、緇は黒衣の僧侶を謂い、素は白衣の俗人のことである。これは印度の昔の風習から出たことなのであります。甚だぶしつけな申分なれども、是処にお集り下さる皆様の間にも、位置階級、教育の有無等、種々様々の別があると思うのであります。それが必ずしも位置の貴き方であるが故に、著しくお喜び下さるというわけでもなく、又賤しきが故に喜びが薄いというわけでもない。ここにお出で下されてこの御本書の講本を手にし、親しく本文を読ませて頂くと又格別有難いとお喜び下さる方もあれば、これを引繰り反して見ても私には読めぬ、読めぬで弥々有難いと言われる方もある。

かく平日は教育の有る無し、僧侶と俗人、位置の高下、様々の別があると思うているのであるが、いよいよこの信心の一段となると、僧も俗も、男も女も、年老いた者も若い者も、――ここにお出で下さる中には、在来の説教を聴聞しなれた老人の方もあれば、又新しき考えで求められる青年の人もある。又禅でやられた人もあれば、中にはキリスト教の方もお出でになる。

かく老人も青年も、又学問のある人も無い人もお出でになるのであるが、それが学問があるから必ずしも貴いでなく、又一文不通であるからお慈悲が分らぬというのでない。さればとて又学問が無かったら頂けようにも、有るから頂けぬと、学問が有るのが何の妨げにもならぬ。『和讃』には

聖道門のひとはみな　自力の心をむねとして、
他力不思議にいりぬれば義なきを義とすと信知せり

聖道門の如何に学問の有る人でも、弥々他力不思議を頂く時は「義なきを義とす」と頂かれる外無いのである。又法然聖人門下の随蓮坊の如く、初めより何もわからず、唯南無阿弥陀仏々々々と頂くも結構なのであります。

七

又次に、

『造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず。……』

これは『歎異鈔』の中に詳しくお知らせ下されてある。即ち十三章に、

（上略）うみかわにあみをひき、つりをして世をわたるものも、野山にししをかり、鳥をとりていのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畑をつくりてすぐる人も、ただおなじことなり。さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべしとこそ聖人はおおせそうらいしに当時は後世者ぶりして、よからんものばかり念仏もうすべきようにおもい、あるいは道場にはりぶみをして、なんなんのことしたらんものをば、道場にいるべからずなんどということ、ひとえに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか。願にほこりてつくらんつみも、宿業のもよおすゆえなり。さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ他力にて候え。

実にかくの如く如来の遣る瀬なき大悲の前には、造罪の多少を論じない。法然聖人が信空上人の白河の室で御法話の時には、縁の下で聞いていた梟悪殺人の耳四郎が、広大のお慈悲に感じて、共に喜びに入ったのである。又上は関白兼実を初め、熊谷直実の類や、平重衡の輩に至るまで、敵も味方も、公家も町人も、乃至男も女も子供に至るまでも、南無阿弥陀仏々々々と、法然聖人の御指導の下に、遣る瀬なきお慈悲一つを喜ばせて貰うたのである。

さればといつて何も悪くならなくてはいかぬと考えて、悪くもない身をわざわざ傷つけるにも及ばぬ。よく中には一層のこと悪事でも犯したらお慈悲が頂けようかと、苦しみて言われる人がある。自分で力んで悪い事したとて、それで吾が身の悪しさに頭が下がるというものでない。そういう心が、即ち自分で一つ角善い事が出来るという根性を離れぬのである。

ひるが

又今までどれだけ修行せられた智者聖者と雖も、このお慈悲の不可思議を頂かれる時には、すべて今までの自力作善を廻えして、本願のおまこと一つを頂くのである。仏の遣る瀬なき御真実を頂かせて貰つた上からは、今まで自力修行にかかわつて長い間お慈悲を頂かなんだ事の長ければ長きだけ、いよ／＼申訳けがない。故に修行の長き者は、長きを以て法に入り、短きは短きでいよ／＼お見捨てなきお慈悲を喜ばせて貰うのである。又、

『行に非ず、善に非ず……』

ここになるともう何とも言葉が絶えて言いようがない。

『歎異鈔』に、

念仏は行者のために非行非善なり。わがはからいにて行ずるにあらざれば、非行という。わがはからいにてつくる善にもあらざれば、非善という。ひとえに他力にして自力をはなれたるゆえに、行者のためには非行非善なりと。云々。

とあるは、ここなのであります。我々が南無阿弥陀仏々々と念仏称えるは、即ち行をするのであるというと、即ち念仏を一種の行である、善であると思う人があるかも知れぬ。さりながら念仏は如来廻向の大善大功徳であつて、即ち如来の善であり、行である。我々の行、善とはならぬのである。

然らば全く我々の行でなきか、善でなきかというに、今吾々が南無阿弥陀仏々々と念仏称えさせて貰うは、即ち親が私の為めに下された金、着物を我々が有難く頂いて我々が如来の大善大功徳の着物、金を着、用いさせて貰うのである。故に我々が着、用いさせて貰う金、着物なれども、その金、着物は、我々自分の金、着物でなく、親より着させ、用いさせて下さる金、着物である。故に南無阿弥陀仏の一念仏を、他力大行の催促とお知らせ下さるは、これなのであります。

八

又、

『頓に非らず、漸に非ず。……』

「信心は円頓の理法によりパッと一辺に頓悟するものである」「いやお慈悲は然うじやなく、何時の間にかそろりそろりと漸次に頂けるものである」などと、そんな一辺に頂くとか、そろそろ頂くとか、いう事が信心にあるものでない。仏の遣る瀬なき、お見捨てなき広大のお慈悲一つが届いて下された処が信心なれば、かかることが信心の要件とならぬのである。「いや私は頂いた一念に覚えがない故、頂けて無いかも知れませぬ」と、そんなこと言つているから、肝腎のお慈悲に腹ふくらせて貰うことを忘れ、信心が横の方に飛んでしまうのである。故にお慈悲は頓に一

辺に悟るにも非ず、又漸々に修養して信仰の域に到るのでもない。飽くまでお見捨てなき広大の思召一つが届き、充分にその御親切一つに腹ふくらせて貰うか否やが信心の問題なのであります。又、

「定に非ず、散に非ず。……」

定は即ち仏法専門で、吾々が禅定を修し、静かに考察して行かうとするのが定である。又散はこれに反し我々が兎角の念慮を用いるでなく、飽くまで実行し活動で到ろうとするが散である。

即ち今日の言葉で言えば、定は冥想的に安心を求め、散は実行でその境界に到ろうとするが散であります。ところが今、遣る瀬なき他力の信心は、その冥想的の定でも無ければ、実行的の散でも無い。若し我々が冥想的に十界一如の理を観じ、了々分明に仏境界の有様を心中に明らかにすることが信心だとする時は、到底我々には出来やせぬのである。いかにいわんや我々が限り無き理想を追うて一々実行して行かうと言うたとて、到底それが我々には出来るものでない。

ところが、兎角我々にはこの二つの病癖があつて、即ち青年の人にする時は、常にお慈悲の面影を心中に浮べ、飽くまで冥想思索によりて行くのであると、何時までも冥想空想より離れる事の出来ぬ人は、即ち定善の人である。又一方は、正義、道徳、理想というようのことをやかましく言う人にて、即ち「人間は何処までもその敵を愛しなければならぬ」「身を捨てても人のため尽さなければならぬ」と常に理想の実行々々と努めている人は、散善の人である。

ところが今他力の味いは、この定善の心持ちでもなければ、又散善の心持ちでもない。『歎徳文』のお言葉には定水をこらすといえども識浪しきりにうごき、心月を観ずといえども妄雲なお覆う。云々。

我々の散乱不定の心持ちでは、何程禅定をこらすといえども、はたから／＼貪欲の妄雲のために覆われて仕舞い、又如何程実行々々と努めても、結局名利と迷いのために外ならぬのである。『往生要集』に源信僧都は言われている。

顕密の教法、その文一に非ず。事理の業因その行これ多し。利智精進の人は未だ難しと為ず。予が如き頑魯の者、あにあえてせんや。

処がその如く定散の冥想も出来ぬ、又散善の六度万行の実行も出来ず、理想的行為も忽ち行き詰つてしまう、その如き浅間しき、邪推深き、人に心の隔たる、そのして見ようなき煩悩強盛の心中を御覧下されて、それが如何にも可哀想で捨てて置けぬとの、その遣る瀬なき大悲の御親切を頂いた時が信心であるから、即ち「定に非ず、散に非ず」であります。

未　完

善財童子の求道

福島政雄

摩耶夫人のこと

それで瞿夷女に別れて、その次の善知識、摩耶夫人が正面に現れて参ります。この等覚の位、仏のおさとりの位と等しい、その位を代表する摩耶夫人、それが五十一番目になつております。

これは近角先生のおしえで「慈光」で読みましたが、等覚と妙覚というところに大事なけじめがあると仰言つていられます。我々は成程仏の導きを頂いて、この世の営みをしているが、この世このままで仏様になつたと、そういうことは云えない。我々のお慈悲を頂いたこのかたちというものは、まあ等覚といえよう。仏様のおさとりと等しいと、こうさして頂くが、同じいというのは間違いであります。いよいよ私のいのち終つて阿弥陀仏の世界に生れるということになると、そこで妙覚ということになる。我々はこの世にある限りどんな御信心の心持がひらけても、それは等覚という境地であると常観先生がとかれてありますのを、どうもこの頃「慈光」で読みましたようであります。

成程先生の仰言る通りであると感じますのであります。このままで仏様のようになつたなどというのは大間違いであります。仏様のお慈光が自分に何処々々までもしみとおつて下さるというところで、仏の境界と等しいという心持を私共に開いて頂く、ただそれだけである。私共がお信心が開けたといつて決して私共の煩悩が無くなつたということは無い。相変らず煩悩の生活が続く。然しながらその煩悩の生活の底までしみとおつて、飽くまでもそれを何とかしてやらねばならぬという仏様のお慈悲というものが自分の腹の底の底までしみとおしてくるというそのことであると、こういう風に私は頂くのであります。

母性の問題

今、善財童子は摩耶夫人、等覚の位の善知識として摩耶夫人を拝むという、これは盧舎那仏という、一切世界を包容されるところの摩耶夫人、それを善財童子は拝むということになる。非常に広大無辺の母である。こういうことになるのであります。

そういうことを華厳経で読むのでありますが、母性という問題は仲々深い問題であるということを思わされるのであります。私は西洋の教育ではスイスの大教育家でありますところのペスタロッチーについて十年ばかり若い間一心にしらべたのでありますが、ペスタロッチーは矢張り母性というものを非常に重んじております。母というものが本当に子供の心をひらくというところをペスタロッチーは非常に美しく書いて居ります。この頃になりましてスエーデンの女の人でエレン・ケーという人が前世紀の終りの年一八九九年に出版しましたところの有名な著述でありますが児童の世紀というのがあります。日本訳も出ておりますが、私はこの夏休に原先生訳のものを読んで見ますと、エレン・ケー女史は教育というものは母親でなくては出来ないことがある。それに今の社会では段々母というものがなくなる、というのは所謂労働者社会では朝から晩まで、父親も母親も工場にいつて働いて日暮れ時に帰つて子供に接するけれど、それじや母親の子供に対する本当の教育というものが出来ない。それじや上流階級はどうであるかというにこれはまた駄目であつて、始終何々クラブの集りとか、何とかの宴会に行つて家を留守にばかりしている。母親の働きというものは子供には及ばない。それで所謂上流もそれから労働階級も駄目、それから今の学校というものも碌でもない学校であると、これは今の日本の学校というものが一番よく当てはまる問題であります。今の学校というものは子供の個性を殺すようなことをやつている。十六年も長い間子供を引張つていて、その間何をしているかというように、子供の個性を段々殺す。それから子供の観察力が段々鈍つて行くような教育をやつている。本当の学校の教育なれば一人一人の子供の長所を延ばして行くようなやり方をしなければならぬのに、皆の個性を延ばすどころか、それを無くして行く。そういう教育をやつている。こういう教育では駄目である。本当に母の教育というものが改めてよみがえつて来ないなれば、この人間社会はとんでもないものになつて行くというようなことを大いに論じてありまして、私も非常に愉快に感じたのでありました。

もつともこのエレン・ケーという人は一生結婚しなかつた人であります。母親が大事だというけれども、自分ではどうも自分の子供を育てたということがないのであります。この人は晩年になつてから「母性の復興」という著述がありましてそれを読んでみますと、自分が或る孤児院のようなところへ行つたところが、そこの子供が争うて自分の膝の上に乗つて来た。そこで非常に感じた。母というものは自分で自分の子というものを生んで、自分で自分の膝の上で育てるということをしなければ本当でないということ

とを非常に感じたといつて居りますが、これはエレン・ケーは非常に淋しかつたのでありましよう。仲々著述を沢山やつてヨーロツパ全体にその著述が読まれたそうであります。そういうところがありましたけれども母というものにならなかつた、そして晩年になつてから非常に淋しい。それで晩年になつてから「母性の復興」というのを出して教育の上において母性というものが、どういう大事なものであるかということを述べている。これは如何にもそうだと思うのであります。私はその母性の復興という本を若い時に英訳本で読みまして非常に興味を感じまして、それの紹介、批判の書物も出しましたけれども、今頃は手に入らぬ本になつております。

そういうことで、すこうし家庭というものを大事に考える人は、家庭における母性、母というものの働きを非常に大事に考えているのでありまして、この母の働きが及ばぬようになつたら、この人間の世というものは非常に殺風景なものになつてしまうという。そういうことを西洋の教育の上からも大事な人が述べているのであります。

幼稚園のこと

そういうことなのでありますので、善財童子が五十一番目に摩耶夫人を訪れてそのみ教を聞く、その摩耶夫人は一切の菩薩や仏を生み出す母であるという広大なことを書いてあります。つまりこの世の中の一番最後に近い大事なことは、母というものがこの世の中を生み出して行く。そうするとこの摩耶夫人は華厳経の上のただの摩耶夫人というのでなくて、この人間の世の中の一切の母親というものが、皆この摩耶夫人であるべきであります。本当に自分の子を自分の膝にのせて自分の大事な心持でそれを育てて行く、母親でなければ出来ないことをやつていく、幼稚園にやつても駄目であります。今頃の幼稚園というものは、文部省などはそれを義務教育にすると云つておりますけれども、それはまあそれでよいかも知れませんけれとも、今の幼稚園というものは、実に皆さんのうちに小さなお子様のおありの方がありましようが、考えものであります。

ドイツのフレーベルという人が幼稚園を始めました。幼稚園という名は、ドイツの言葉ではキンデルガルテン、子供の園という意味でありますが、それを幼稚園と訳してあります。フレーベルが初めてブランゲンブルグというところで初めて幼稚園を始めたという時のフレーベルの考えでは、ドイツ全体の子供というものは花園の花のようなものである。その花を大事に育てていく、花園の花守りというものはただ幼稚園の保母ばかりではない、ドイツ全体の母、婦人、ことに母親というものが花園の花守りであつて、幼稚園というものは、全ドイツの子供の花園のような

ものであると考えていたのであります。

ところがその幼稚園というものが段々のちになつて貴族化しております。もう三十年も前に私もそのフレーベルの遺跡を訪ねて行きまして、フレーベルが初めて幼稚園をこしらえたというブランゲンブルグという町に、それは山の中の町でありますが、その時にその町の幼稚園を訪ねて、園長さんに、その方は女の人でありましたが「今のドイツの幼稚園というものは、フレーベルの本当の精神にかなうようになつていますでしようか」とたずねてみたのでありますが「イヤ全く駄目であります」と園長さんが言つて居りました。

というのは幼稚園というものが段々貴族化してくる。そのうちに産業革命の影響というものがあつて、幼稚園の他の托児所、今では日本では保育園といつたり、その保育園という名もよくないが、幼児園という名にしてはどうであろうかとこの頃のお考えもあるらしいのでありますが……この托児所と幼稚園というものが分れて、それも仕様のない産業革命の結果でありますけれども、今度は幼稚園というものが段々貴族化して来ている。現在の日本の幼稚園というものがそうでありまして、私の今居ります近在の幼稚園といものが、若い奥さんなどが、小さい子供さんを幼稚園にやつていられますようでありますけれども、その心持は、自分の子供を幼稚園にやつているぞという一種の虚栄がそこに伴つております。そして本当に母親として、母親でなけれ出来ないようなことを子供のためにやつていなくて、幼稚園に依托しているようにどうもなつているようであります。そういうのは甚だ歎くべきこと残念なことでありまして、幼稚園はあつてもよいのでありますけれども、母親というものが、母親本来の教育上のつとめというものを、もう幼稚園にまかせたから大丈夫だというように考えないで、自分の大事な子供に、幼稚園にも出来ないようなことを自分が子供にやつてやる。これが今ではどちらかといえば駄目でありますがこれが社会全般にあらためられて行けば、この善財童子の訪れた摩耶夫人の如くであります。

その摩耶夫人は、一切の菩薩を生み出して行く、そういう広大なる摩耶夫人であつて、母親である皆様はその摩耶夫人のひとかどの仕事をなして下さる、そういうわけになるのであります。

それでありますからここはお経の表面だけ見ていると、何か不思議なことを書いてありますけれど、実際問題となると、そういうことに触れる、大事なところ、五十一番目の善知識が摩耶夫人である、それは一切の菩薩の母であるここが大事なところであると思うのであります。

弥勒から普賢へ

その次には、善財童子は弥勒菩薩を訪ねて行きます。こともゆつくり読んで見ることは出来ませんでしたけれども弥勒菩薩のところに行つて、非常に立派な楼観、たかどのといいますが、そういうものを見る。

それから空・無相・無願ということを教えて頂く。これはむづかしくなりますけれども、大無量寿経に出ております、空・無相・無願、仏教のもつ大事なところで、一切空、一切の姿に執着しない。また自分の願というものに執着しない。まあ簡単に云えばそういうことでありましょう。そういうことをさとるものは、どういうところに居られるかを見せて頂く。それから善財童子は弥勒菩薩の自分の場所にじつとやすらかに落着いていられることを讃歎いたしますと、弥勒菩薩はまた善財童子を非常にほめられるのであります。そして弥勒菩薩が文殊菩薩のことを述べる。それから童子を広大な三昧の中に導くのであります。つまり心の中をしずめて、その心の前に色々な立派な世界を見せられる。そういうことを弥勒からひらかれるということがありまして、つまり百十一の城を過ぎて文殊にあうのであります。

遇うといいますけれど、初め善財童子が文殊にすすめられて求道の旅に出で立つたのでありましょう。ここでは文殊はどういう現れ方をしますかと云うと、善知識の姿で現れたと云うのじやないのであります。善財童子をソーッとうしろから抱いてやるという、そういうようなあらわれ方をするのでありまして、お経の文句では、文殊は還り摂して現ぜず、かえつて自分の中につつんで、善財童子の前にあらわれたのでないと、こういうことになつております。

そういたしますと、善財童子が五十何人の善知識をたずねたというのは、実は文殊のふところの中でやつている。文殊は知恵の文殊でありますからして、文殊の知慧に導かれて一切のものを善知識として拝んで歩くと、こういうことをやつたのである。

普賢の十大願

そして最後が普賢菩薩を訪ねるのであります。そうすると普賢菩薩のところに色々詳しいことがあるのでありますけれど、普賢が十の願を持つているということを善財童子に告げます。

これは四十華厳の方に出ていることであります。十の願、

一つに諸々の仏様を敬い拝むということを続けて行きたい。二つにはその如来を賞讃、ほめたたえることをしたい三つには広く供養をし、如来に供養し、一切衆生に供養するという意味でありましようが、供養のことをひろく行いたい。四つには自分の業障、自分の業、煩悩のさまたげを懺悔したい。五つにはその功徳をよろこぶ、仏様から頂く功徳を非常に嬉しく思うということを続けたい。六つには転法論をお願いして、どうぞ私に法をお説き下さい。何処までも法を聞いて行きたいというのであります。七つは仏様が何時までも何時までもこの世にとどまつていられることを願いたい。八つには常に仏様に随つて学ぶことを続けて行きたいと思う。九つには恒順衆生で、一切衆生のこころにしたがつて行きたい。つまり一切衆生のこころに願うことをかなえて行きたいと思うことでありましよう。そして十には、普く廻向して、自分の一切のものを皆々に廻向して行きたい。

この十の願があるということを普賢菩薩が善財童子に告げるというのでありますから、普賢菩薩にありともう求道の終りというのでなくて、普賢菩薩の教はこれからさきも何処々々までも仏の道を求めて行くんですよ、とこういうことになりますのであります。

そして四十華厳でありますが、最後の偈文を読んで行きますと、

どうか、この世のいのちの終りということになつて、ことごとくこの世のいのちのさわりを除いて、そしてまのあたり阿弥陀仏にお目にかかつて、阿弥陀仏の安楽の浄土にすぐに往生したい。そして阿弥陀仏の浄土に往生したならば、この大きな願を成就して、そして一切を円満にして行き、一切の衆生にまことのたのしみを与えたい。

というのが最後の偈文の大事な願になつております。

それで善財童子の広大無辺の求道というものも、結局は阿弥陀仏の浄土に往生するということに結ばれている。これが非常に大事なことになると思われているところでありまして、つまり弥陀仏の浄土というものは私共の一切の求道のひらけるところであると、こういうことになるのでありまして、私などの頭に仲々入りませんのでありますが、いよいよ求道の最後はそこだということを聞かされましてまことに有難いと感じます次第であります。

こんなことで善財童子の求道ということを終りますのでありますが、私の手控えの手帳をひらいて見ますと、昭和三十三年の五月に始めたとなつて居ります。今日までの間に五年であります。この間本当にとびとびでありまして、初めに申し上げましたことは、本当に忘れておしまいになります頃に次のお話をする。私自身も前にどんなお話を申したかを忘れて居ります頃に、又次のお話をするというようなことになつておりまして、まことに相済まぬことになつておりますが、どうぞ一一のことはお忘れになつても、

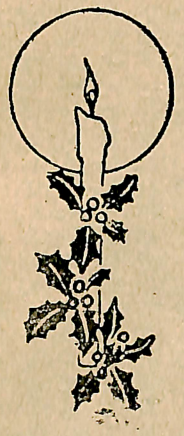
善財童子の求道の上にはどんなものも自分の求道の前には善知識である。それは仲々出来ないことであります。

自分をひどくいじめる人でも、場合によつては自分のいのちをとろうというような人であつても自分の善知識であるというようなことには仲々なれないことでありますが、然しながら善財童子の求道ということはそういうことを教えると思うのでありまして、少しばかりでもそういうことに添うようになりたいと私自身も念願して居ります。

まことに不充分な話でありましたが、これで一応華厳経の話を終りにして頂きます。

（完）

昭和三十八年十二月五日



隨想

西村正安

摂取不捨　南無阿弥陀仏　本願力
かかる他力に　われ酔ひにけり

筆とりて　南無阿弥陀仏と書きつけば
心の中に　踊るものあり

歓喜地や　憶念本願入必定
念仏報典　安心の生

計らひの心の疲れ直る哉
念仏申し　耳に聞く時

口と舌と動かすだけを思ひ出し
申す念仏　乃至十念

顚倒の善果に心踊る時
念仏申して　ものを思える

念仏を称えるための人生哉
われはも有情　長き恩寵

吾むしろ名号不思議にかたよりて
道を歩めばあやうげもなし

思ひみれば地獄に落つる器量こそ
摂取不捨かも　南無阿弥陀仏

此頃はかくも申して念仏を
字に書きたしと妻にほこれる

正法と不思議

福田鉄雄

年とつて殊に私のような病人には熟睡ということはなかなか出来ない。夜中に時々目がさめる。致し方ないことであるが雑念が次から次へとわいてくる。

この間のことであるがひよつと「正法に奇特なし」という諺を想い出した。これは正しい宗教には不思議な利益などない、もしありとすればそれは邪教であるということであると思う。又「正法に不思議なし」ともいうが意味は同様である。

戦後日本に多くの新興宗教なるものが続発した。そしてその教祖及びその側近を中心として漸次末端細胞を増殖組織し、その教を信ずるものは、金持になるとか、或は病気がたちどころに治癒するとか盛んに現世の奇特不思議の御利益にあずかる事必至と宣伝し、本尊とかいうものをかつぎまわつている。その説くところは前述の諺とは正に反対で自ら邪教であることを明白に広告暴露すべく懸命に行動してるのではあるまいか。

世の幾百万の老若男女は之等新興宗教に、鉄の磁石に吸着される如く翕然と集まる。先般ある教団の如きは近く政界に大進出すると宣言したとかいう。この現状をみてひそかに危惧の念を抱く人もあろう。又その燃えさかる火の如きエネルギー発散の異常な光景に驚きの声を発する人もあろう。或は又その宣教手段方法の功妙さに舌をまき我が方にてもなんとかせねばなるまいと身構える人が、既成宗教の宗派にも二三いるときく。それはともかくとして之等新興宗教に多数の青年男女が参加していることである。之等の若者は戦後、民主主義、合理主義、自主的精神の育成等の指導原理により教育された人々である。彼等の多くは勿論自発的に参加したであろうが、中にはなかば強制的に説得されて加入した者もあるという。日本国憲法に於いて信教の自由、基本的人権の保障されている現代に於いてまことに奇怪な話である。

近頃青年層の間に自分の運勢をみてもらうことが流行してるそうであるが、これは生きることに対する自信の喪失と生活不安を抱く若者が相当多数いる証拠ではあるまい

か。

しかし以上の事柄は今の私には何のかかわりもないことである。話を本題にもどそう。

私にとつて正法とは何か。親鸞聖人の『教行信証』に

「つつしんで浄土真宗を案ずるに二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の廻向について真実の教行信証あり。それ真実の教をあらわさば、すなわち大無量寿経これなり」

とある。正法とは、『大無量寿経』であるとお示しになつておられる。そこで早速枕頭の真宗聖典を開き、その眼目とされる四十八願を拝読した。

なるほど弥陀の大慈悲心から発起された御本願で私如き凡夫をあわれまれる大御心は、ただありがたく何の不思議もない正法である。

ところでこの病床に横たわる五尺余の瘦軀の私は一体どうなるのかと考える。そのとき『歎異鈔』第一章の

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」

というお言葉がおのずから想い出される。これはどうしたことか。一生造悪の痴愚の私がおたすけにあずかるのである。地獄一定の身が浄土往生出来るのである。これこそ一大不思議である。御仏には、ただたすけたいの御一念で何の不思議もなくあたりまえのことと思召し、ひたすらに私をやるせなく思うて下さつておられる。その御心を今頂くことが出来る、ありがたいことである。これをして私にとつて不思議といわずして何んといわれよう。不思議なしの御心と、おたすけにあずかる不思議との間に何兆分の一秒の隙もなくつながつていたことに気づいた。細く切つた紙を一度ひねつて両端を糊でつないで環をつくる。鉛筆で表であると思う面をたどつて行けば、いつしか裏をたどつている。紙を一度まわすということは廻心ということであつたかと気づく。不思議なしという語と不思議とは何の矛盾もなく連続している。

以上のような戯論、妄想を何となくたくましくしていたら、ああここ何年来なやんできた例の心臓の発作がはじまつて来た。多年の重症結核のため心臓の胸壁に癒着し、心筋はひつぱられ機能不全となる。加うるに肺活量が少く心臓に過重の負担がかかるせいだと、主治医が説明される。結局は老人の心不全症である。何はともあれただ苦しい。激しい動悸が枕に伝わつてくるかと思うと微弱になり脈は速くなる。閉じていた口が自然に開く。左胸部を下にしてじつとこらえる。お念仏は口をついて出て下さる。「何事のおわしますかはしらねどもただ尊さに云々」の古歌の如く、お念仏のありがたいいわれをも忘れてただ称える。

「無義をもて義とす」のお言葉が味わわれる。主治医から渡された薬をのむ。このままお浄土まいりが出来たらどんなにかありがたいことかと思う。だんだん頭が混乱して『歎異鈔』や『御和讃』の御文、さては近角先生のお言葉が走馬灯の如く、ぐるぐるとかけめぐる。かくして何時間か堪えているうち次第に朦朧となりねむつたであろう。

数時間の睡眠後目覚め「ああついに昨夜も死にかねた」かとおもう。心臓の発作もおさまつている。

短夜や心不全あり念仏あり

などと駄句つてみて、これは俳句でなく排句か非句だなどと他愛もないことを思う。ああそれにしても今日もお念仏を称えさして頂ける身でありながら、何十年となく私の看病にあけくれてきた妻に、またまた不足をいい、口に出さないまでも心の中は醜悪極まりない天の邪鬼となる私である。とやかく心の動くままに堂々巡りしているところへ妻が朝飯のお膳を運んでくる。たとえ御馳走がささやかであろうと四十年なじんだ味である。一粒の御飯、一汲の汁、この食餌を頂くまで自分は何一つなしたであろうか。幾万人とも知れぬ人々の汗と手により、更にわれわれの思いも及ばぬ微生物によつて造られて今ここに運ばれてきたのである。これはわが命をささえて下さる宝である。

私はお茶椀の中の御飯をジツとみつめる。そして一箸をとつてかみしめる。お念仏と共にかみしめる、ますます甘くなつて自然に食道に流れていく。お念仏をとなえながらかんでかんで味おう。

かくして一時間余りもかかつて食事をおえる。自分はこうして生きてきた。そして今も生きている。勿体ないことである。ありがたいことである。

私は今まで薬餌を頂くとき幾度感謝の涙を流したかしれぬ。世のため何のお役にもたたぬこのなさけない病体の私が、もしありがたいお念仏の正法の不思議にあわなかつたらどうなつていたであろうか。

智慧は御仏にある。私には何の智慧もない、思想も無い。何のはからいが私に出来よう。ただ「無義をもて義とす」というお念仏だけのこる。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

合掌

御声一つ

源通寺老師

お声ひとつ、天地法界に今のお声ほど尊きはなし。
南無阿弥陀仏、今呼んで下さるる。
南無阿弥陀仏、また呼んで下さるる。
今じや、今じや。
ながき夜のやみ路をてらす光には
称うる御名のほかにやはある。

ふるさと

松本解雄

ふるさとの山に向ひて言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

これは言うまでもなく、若くしてこの世を去つた天才詩人、石川啄木が、そのふるさと、岩手県渋谷村の山を歌つたものである。しばらくぶりでなつかしいふるさとに帰つてきて、美しい緑の山に向つたとき、今までの苦しみや悲しみもすべてがぬぐい去られて、大いなる安らいの中にいる自分自身を見出し「ああ、よかつたなあ！」という心持ちを三十一文字に託して表現したものと思われる。

同じ東北地方を故郷にもつ私にとつて、とりわけこの歌は印象深い。そして特に私にとつて「言ふことなし」の一句は、日常的な意味以上に宗教的に味うことによつて、一入の感銘を覚えるのである。

あまりにも言うことの多いこの世にあつて、その言うことのために、ともすれば自分自身さえも見失つてしまうような現実に突き当つて、ただため息に明け暮れ、自分の行方もわからなくなつた時、はからずも大悲招喚の「汝一心正念にして直ちに来れ」のみ声に接し、「その名号を聞いて信心歓喜」と、全く「言ふことなし」の境地に立たされるのである。それは、『歎異鈔』における

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」

の天地である。

そこはまた、『教行信証』の、

「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ずる」

の世界を味うことも出来る。

ふるさと、心のふるさと、そこは永遠の母の待ち給うところ、私は竹久夢二作詩、小松耕輔作曲の『母』の歌を思い出さずにはいられない。

ふるさとのやまのあけくれ

みどりのかどにたちぬれて
いつまでもわれ待ちたもう
母恋はしも。

幾山河遠くさかりぬ
ふるさとのみどりのかどに
今もなお　われ待つらんか
母は　遠しも。

○

去年　今年　命はかなく散りゆきし
人さまざまに何を語るや
現世はむなしきものとのたまいし
聖の御言ただにかしこむ

＜谷川博士の講演をききて＞

そこしれぬ井戸の深きに狂いしに
待ちうけてあり　大きなる御手

昭和三十九年七月発行。
愛媛大学仏教青年会誌『蓮』より

聞思して遅慮すること勿れ

「誠なる哉、摂取不捨の真言、
聞思して、遅慮する事勿れ」

五逆謗法、悪重く障り多き身も、一善積まさず、一行修めさせず、惑を断ぜさせず、そのまま摂め取りて捨てぬぞよと仰せらるる。これが誠の中の誠そと「哉！」の字を使用なされてお知らせ下されたのであります。

そこで聞いた通り思え！聞いてから考えて、それから思えではない。摂め取りて捨てぬとある誠のお言葉を聞いて、助かると思うままが信心であるから、聞即信であります。

「遅慮すること莫れ」とは、聞いてそんなことはあるまいと思うは裏心である。今は聞く通りを思うを、聞思してというので、それが遅慮することなきすがたであります。恵心僧都の御歌に

夏衣ひとえに西を思ふかな
うらなく弥陀をたのむ身なれば

とはこのおこころであります

——利井鮮明和上、遺語——

源信僧都和讃の三首

花田正夫

僧都は今から千余年前に大和国当麻の里にお生れになりました。十三歳で叡山に登り、血のにじむ求道を続け一切経を五遍も読み破られましたが、聖道の道はけわしく「利智精進の人はいざ知らず、余が如き頑魯（かたくなでおろかもの）の者あにあえてせんや」と、智目行足を欠く身と自照せられて、遂に「往生の業は念仏を本となす」と専ら念仏の人となられ、七十六歳御入滅の日までひたすらこの大道を世に掲げられました。

親鸞聖人は僧都を日本における最初の浄土の祖と慕われて十首の和讃をもつてその御信徳をたたえられました。そのうちの三首をとおして僧都のお導きを仰ぎましょう。

男女貴賤ことごとく　弥陀の名号称するに
行住坐臥もえらばれず　時処諸縁もさわりなし。

末代の凡夫がすくわれるたつたひとつの道は、念仏の一道でありますが、その念仏申すについて、男女の別も、貴賤の差もへだてが無く、歩きながらでも、じつとしている時でも、或は坐つたまんま、或は臥せながらであろうとさわりにならないばかりでなく、何時、何所で、どんな境遇であろうと、ちつともさまたげにならないとおすすめ下さるのであります。

私共はこの御和讃によつて、尽十方無碍光如来の広大無辺なおへだてなき悲心に驚喜せしめられるのであります。

静かに世間をかえりみます時、台所の隅から世界の外交場裡にいたるまで老少善悪のへだてばかりであります。

老人は若い者が理解出来ず、若者は老人を退けるという具合に、相対五分五分の争いが到るところにくりひろげられて居ります。

更に、世界に色々な立派な教えがありますけれど、聖人は救われても小人は捨てられるという風で、ギリギリのところで、力つきて退くより外に道がありません。

人生のいたるところに、つめたいさばきの風が吹きまく

つて、身も心も凍りつく寒さであります。こうした世に唯一無二の光とあたたかみが仏心からさして参下さるのであります。

釈尊御在世の時、阿闍世王は父王を殺害し、母を牢獄に幽閉しました。そののち自分の非を知り、大煩悩におちましたが、耆婆大臣の勧めによつてようやく仏前に進みますと、待ちに待つておられた釈尊が

「大王よ」

と呼びかけられました。然し、相対差別の心しかない阿闍世王は、自分のような大悪人を、釈尊が、大王などとお呼びになるはずはないと思いこんで、きつと人違いであろう誰か王らしい者は居ないだろうかと、左右を見廻すのであります。すると釈尊は、己が罪にさえられて仏をもへだてずには居られない王の心中をお察しになつて

「阿闍世大王よ」

と再び呼びかけられるのであります。王はもう疑う余地もなく釈尊の慈顔を仰ぐのであります。その時

「仏心平等にして更にへだて無きを知りました。この喜びは、天界の如何なるたのしみもくらべものになりません。もうそうしたことに用事がなくなりました…」

と慶喜して居ります。

私はこの阿闍世の悲歎と随喜に心うたれるのであります。自分のような大悪人は誰が相手にしてくれようか。自業自得、身から出た錆で地獄は必定であると、孤立無援の暗黒裡に沈む阿闍世こそ私の姿であります。それなのに思いもかけず仏陀はこの者をあきれずへたてず捨て給わずしてお迎え下さるとは！この広大無辺な仏心こそ、二千五百年をつらぬいて、あらゆる人々の真実のよるべとなり、ひかりとなり、喜びとなつて下さつたこころであります。又これあつてこそ資生産業の各部門にあるまんま、安心して救済の光を仰くことが出来るのであります。

極悪深重の衆生は　他の方便さらになし
ひとえに弥陀を称してそ　浄土にむまるとのべ給う

極重悪人ということで、涅槃経に、「五逆の罪を犯し、殺生、偸盗、邪婬、妄語などの四つの重い禁戒を破つた者をいう」と説いてあります。観無量寿経では「五逆、十悪、破戒等の罪をもつ者を下品の機」とありますのが、これに相当いたします。

さて僧都の御書や御伝をうかがいますと、僧都御自身が極重悪人であると告白懺悔せられているのであります。

「往生要集」の下巻に「大乗の教を修行する上品の位はたとえ深くてもそれは我身に不相応で、下品の愚悪人こ

そ、我寺か分である」と仰せになつていられます。

又僧都御作の「二十五三昧式」に、

「夫おもんみれば三界皆苦なり、…苦と無常を誰かいとわざらんや。然るに我等無始よりこのかた徒らに生じ、徒らに死して、猶いまだ道心をおこさず、亦悪趣をまぬがれず……。そも〳〵観経を案ずるに云く、『或は衆生あり五逆十悪を作りて諸の不善を具す。かくの如きの愚人悪業をもつてまさに悪道におち、多劫を経歴して苦を受くる事窮りなかるべし。かくの如きの悪人命終の時、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説いて、教えて仏を念ぜしめるに遇えり。かの人苦に責められて仏を念ずるいとまあらず、善友告げて曰く、汝もし念ずること能わずば、まさに無量寿仏と称すべし。かくの如く心をいたして声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称す。仏名を称するが故に念々のうちに八十億劫の生死の罪をのぞき、……極楽世界に往生することを得たり』この文われら来世の誠証とするにたれり云々」

とあります。

更に七十六歳の六月十日に、僧都の臨終にあたられて、側近の人に、「観経」の下品の文を読ましめられながら、念仏の息たえ終わられたのであります。

又僧都が菅三位文時郷に、「観経」のこの思召しを示されると文時郷は「われら如きも往生にうたがいなし」と随喜し、念仏おこたりなくめでたく往生せられました。

このように、僧都御自身が極重悪人に帰られて、その者を仏かねてしろしめしての本願よと深く感佩せられて、ひとにも念仏の一法をおすすめ下さつたのであります。

煩悩にまなこさえられて　摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて　つねにわが身をてらすなり

「観経」を拝読しますと、韋提希夫人の求めに応じられて釈尊が浄土往生の道を順次おときになりますが、そのはじめに心を静めて浄土と仏と聖衆を観ぜよと仰せられ、その行が段々成就されまして、第九観に進み、弥陀仏の真身を観察出来るようになるのであります。

ところがそこで、「弥陀仏の御身から光明を放たれていてその光明が十方世界をあまねく照らして、念仏の衆生を摂取してすてられない」というお姿を拝するのであります。

驚くことには、その観の成就した者を照らされていないのであります。そこに仏の真意は「称名念仏」にあることが知らされるのであります。天台家では観念を尊びますが、その中に居られながら僧都はすでに「極重悪人」に帰られ仏の本意にかなつて「唯称仏」の一道をたどられました。して見れば念仏の衆生であり摂取の光明を蒙つて居られます。それなのに、煩悩の雲霧が常にこころの眼を覆うて、その摂取の光明を明らかに見ることは出来ぬと告白されております。

そこになりますと、多くの人々が、これではいけない、この煩悩妄念の始末は出来ないだろうかと、うたがい、ためらい勝なのでありますが、僧都は、

「大悲倦きことなくて、常に我身を照らすなり」

と信嘗なさつているのであります。この有様を「往生要集」三に、

「父母に子が有り、生れた時から盲で聾である。両親の慈愛の心はいよ〳〵深く、養育したが、子には親を見ることは出来ない。然し父母は盲の子を何時も見まもつているようである。

諸仏が衆生を見そなわすことは、あたかも釈尊がその一人子のラゴラを思われるのと同じように、一子としてみそなわすのであるが、衆生はそれを見ることが出来ない。出来ないけれど、実に諸仏の前に在るのである」

と仏心のまことをそのまゝに頂いていられます。

又、有名な「横川の法語」に、

「妄念はもとより凡夫の地体である。妄念のほかに別に心はない。臨終の時まで一向妄念の凡夫であると心得て…妄念のうちから申し出す念仏は、濁りに染まぬ蓮の如くに、決定往生うたがいあるべからず」

とありますところにも、我等は妄念のかたまりて盲者であり聾者である。その者をたすけんがための念仏でありますから、盲者は盲者のなり、聾者は聾者のなり、仏の光明界裡におさめとられて往生に間違いないそとのおこころであります。

ここで、私の心に浮びますのは、安波勲八先生の「信仰体験録」中の一節であります。

そこで先生は「仏の慈悲に積極と消極とがある。積極的慈悲とは、おかげで念仏申せるようになつたとか、おかげで喜べるようになつた、という風に味わうことであるが、それだけでは不充分である。どんなに聞いても聞いてもどうにもならぬ自分を知り、そのどうにもならぬ身に、おあきれのない想悲のましますことを仰ぐことを消極的の慈悲と申しておく。さて順調な時は積極的慈悲でくらせるが、逆境が重なるとか、生死厳頭に立たされるときは、この消極的慈悲が唯一の力である。自分も平素は大きなことを言つていたが、いよ〳〵胃癌で、手術も不能と知らされた時

は、まつ暗になつて、ビクツイタ。このいよ〳〵となるとまつ暗になり、ビクツイク奴だから仏のお慈悲がましますのである云々」

と述べて居られます。

煩悩に眼がさえられて、仏の摂取不捨の光明を見ることは出来ませんが、この見るに目なく、聞くに耳なき者をこそ、いよ〳〵不愍にといつくしまれる仏心は、実に生きたまことであります。盲人が太陽を見ることは出来なくても、太陽は常に全身を照らして下さるのは事実であります。その生きたまことをそのままに、

煩悩にまなこ障えられて　摂取の光明見ざれども
大悲倦きことなくて　常に我身を照らすなり

と仰せ下さるのであります。

臼杵祖山老師の御臨末近い日の遺詠に

慈悲知らぬままにめぐみにめぐまれて
　めぐみの外に生けるわれなし
知る知らぬわがこころねのおよびなき
　尊きみめぐみ　深きみめぐみ
御慈悲にめぐまれながらみめぐみを
　知らざるままにみめぐみに生く
目覚めなきさとりもわかぬ盲人の
　ただ御慈悲にみちびかれつつ

とありますことも今さらのように身にしみることであります。

南無阿弥陀仏々々々。

青あらし

谷　鼎

偶成

おびただしくそそき入るとも一分を増さざる海を何せむとすや。

おぎろなき天地のうちの一粒をおもひし人はつつましくしき。

いささかの予想のごとき思ひありて今日の日をただ明日へとつづく

末法の世をののしりて逞しくふるまひ説きしいにしへのひじり

冥利といふ言葉しばしばきかされきふとこぼしたる白きこの飯

生きたれば遠くたよりをおこしたり三十年をへだてたりけり

法信抄

愚痴と念仏

茂木病院　桑野業人

無一物中無尽蔵の世界、遠くなり近くなり、相通える無碍の一道、真施奪脱、不浄説法、五逆誹謗正法の罪業。

五月以来ヨル、ヒル休まず、地震の如くに、或はひくく或は高く、苦痛ひつきりなし。

友が「業報は悲しけれどもホホエミて、うけよこの道」念仏の道」とはげまし、見舞いくださつたが、ホホエムどころか、二ガ虫に、シブ柿食うたような、鬼か蛇の顔。ただ念仏の息で生かされている。

四ケ月も食事不能、小麦胚芽と青汁と漢薬、白南天の実、クチナシ、カンゾウ、煎じて生かして貰つている。……

せんずるところ、いよいよトントつまつてくると念仏一つだよ。才一周行が、

念仏は親の生肝
この才一にくわせる親の生肝
この才一を生かす親の生肝
ナムアミダブツ一つが
まことのまこと
真の六字　南無阿弥陀仏
過、現、未の三世徹貫
あゝ不可称、不可説、不可思議
ナムアミダブツ　々々々々々々々

愈六字の外に、業人の生命とするものは更に何一つなし痛めばいたため、水火三河、タダ中に、やかれつ、ぬれつ、故人の火と水のその中道を行けよ人

きたれとさそう声をしるべに
一歩々々ふみしめて、念仏しています。

ナムアミダブツ、ブテド、タタケド、キハツカヌ、凡夫このまま仏とは、弥陀の不思議な手品なり。

不思議の手品に目が覚めて、御慈悲の中の気楽さは、苦痛の中の御恩の称名。

月の中にて月を見る。無碍のお慈悲の中にいて、無理にお慈悲を知らぬより、親に知られてはずかしや。知らぬ浄土に知らで行け。……

七月十九日。

○

新潟市　佐藤強三郎

大地震に御見舞いただき、御礼申上げます。

人生は何時どんな事が起きるかわかりません。死も亦そうでしよう……

さればよきことも、あしきことも業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはそうらえ。

一生造悪値弘誓　至安養界証妙果

を聞信して行きましよう。

然し死も亦免れたいが、必ず会うことでしよう。

南無阿弥陀仏　昭和九年七月一日

あとがき

八月の広島の原爆の日、その次日こそ近角常音先生の御忌日であります。戦後の日本、そして仏教界の動きについて身をあげて御心配下さつた先生でありました。……

やりそこないまたやりそこない

それだからお呆れない御慈悲でないか

常観言、常音記の短冊も、毎日座右に掲げさせて頂いて、すでに年輪を重ねて居ります。然し私の生涯を通じて日々にあたらしく信営させて頂くことであります。

伊恵子奥様も御病気が恢復されまして、会館に御清安の御日常と承り、およろこび申し上げて居ります。

○

一道会の集りも、京都の浄住寺様では本年は十月二十五日の日曜、池山先生の記念碑の除幕と懇話会。松山市では松本解雄先生宅で月々大学生の方々が中心に歎異抄の輪読会。名古屋では拙庵で第一、二、三日曜に続けて居ります。

「一道」とは、池山先生の用いられました雅号でありますが、よりどころは、「念仏者は無碍の一道なり」と善導大師の「唯仏一道独清閑」からであります。

○

近角先生の「大信海」の御講話は、絶対他力の大信心の讃仰で、聖人が御一代をあげて「信心為本」の法灯を掲げて下さつた淵源もここに存すると愚考いたします。

執筆者の住所録

東京都世田谷区上北沢三の一三一二　福島政雄
盛岡市菜園二丁目六番八号　福田鉄雄
松山市正円寺町三五八　松本解雄
福岡市姪浜町　茂木病院
新潟市関屋堀割三ノ十一　桑野淳城
高松市五番町四丁目十三　佐藤強三郎
西村正安

御案内

一道会
毎月第一、第二、第三日曜
午后一時半。
市電新郊通一丁目下車。

教西寺法話会。
毎月廿四日午前午后。
市電、御器所通下車。
桜花学園の東。

△　◎　▽

慈光　第十六巻　第八号　昭和三十九年八月十五日　発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番